

大学生の共感性研究の動向

井 芹 ま い

【問題と目的】

近年、高等教育段階で身に付けるべき資質・能力として、基礎的・汎用的能力（コンピテンシー）の育成が求められている（中央教育審議会，2016）。コンピテンシーとは具体的にいうと、コミュニケーション能力・ディベート力、課題対応能力、チームワークやリーダーシップを発揮して責任を担う能力、多様性への理解、職業観などである。国際的には、OECD（Organization for Economic Cooperation and Development）が国際比較調査における比較可能な指標の開発を目指して、多国間の研究者からなる DeSeCo（Definition and Selection of Competency）プロジェクトを立ち上げ、成果をキー・コンピテンシー（key competency）として発表している。キー・コンピテンシーとは「自律的に活動する・相互作用的に道具を用いる・異質な集団で交流する（Rychen & Salganik, 2003 立田監訳，2006）」の3つのカテゴリーに分けられ、個人に幸福と成功をもたらす社会を良好に機能させる能力であるという（相川・高本・杉森・古屋，2012）。

これらのコンピテンシーが目標とされる背景として、1990年代後半以降、いわゆる「グローバル化」と呼ばれる現象（Ghemawat, 2007）が起き、言語や価値観、文化や習慣などが異なる

「異質な他者」との相互交流が不可避となったこと（石戸，2007）が挙げられる。様々なことが予測困難であり、不確実性が高まる中（遠藤，2015）、文化が異なる多様な人々を意識し、価値観の異なる存在ともある程度関わっていくことのできる姿勢や、状況に応じて自律的・相互作用的に能力を身に付けていく態度が生涯を通じて必要となってくる可能性が考えられる。

さらに、基礎的・汎用的能力（コンピテンシー）を育成するためには、多様なニーズへの学習機会の保証と、知識だけでなく実践につながる「学び」と「活動」の循環が求められる（中央教育審議会，2016）。コンピテンシーは、より実践的で協同的な集団の中で、状況に応じて育まれる必要があるのである。このような流れの中で、たとえ親しくない相手であっても具体的なスキルを適切に発揮するために必要（鈴木，2015）であるとされる“共感性”は、異質な集団における多様性を理解する姿勢や、自律的・相互作用的な学びにつながる能力の1つとして重要な位置を占めることを本研究では提案したい。

共感性とは、Davis（1994）によれば、“他者の経験についてある個人が抱く反応を扱う一組の構成概念”と定義され、認知的側面と感情的側面といった複数の側面から構成される多次元的概念とされている（櫻井・葉山・鈴木・倉

住・萩原・鈴木・大内・及川, 2011)。そして、多くの異なった分野の心理学者たちが興味を持っているトピックであり (Davis, 1994), 様々な時期に、様々な用いられてきた (Eisenberg, 2000; 鈴木, 2006a)。

具体的には、共感性には3つのことが含まれていると言われている (菊池, 1988)。

まず、相手の気持ちの状態に心が向き、それを「うれしい」とか「悲しい」とかいうことばで表現できることである。これは「共感的関心」と呼ばれている。

続いて、相手の立場にたって考えたり予想を立てたりする力である。自分と他人は違った考え方をもち、違った感じ方をするということが前提となる。共感性のこの側面は「視点取得 perspective taking」(または「役割取得 role taking」, 以下同様) といわれることがあるが、それは文字通り相手の立場 (役割) をとることを言っている。このような側面は、7, 8歳からだんだん伸びはじめ、11, 2歳で大人と同じようになると考えられる (菊池, 1988)。また、「ファンタジー (想像性): 小説, 映画などの架空の人への同一視の程度」という概念でも研究がなされている。

最後に、相手と同じ気持ちになることである。悲しんでいる相手とその悲しみを共にし、悩んでいるときには悩みを共にする。このことが相手に対する思いやりある行動の動機づけとなる (菊池, 1988)。これは「個人的苦痛」と呼ばれている。

このような共感性は道徳的発達に不可欠である (Hoffman, 1990) と言われている。さらに、対人関係の希薄化が叫ばれる今日、青年期における大学生は、社会人として円滑な人間関係を

築いたり維持したりするためにどのような共感性を身に付けていく必要があるのかについて、調査を進めることが急務 (鈴木・木野・出口・遠山・出口・伊田・大谷・谷口・野田, 2000) であると言われている。以上のことから、高等教育段階で求められる基礎的・汎用的能力 (コンピテンシー) の中でも、共感性についての研究を整理することは、コンピテンシー育成研究の基盤となる研究として意義があると考えられる。

ただし、共感性の定義は多義的な概念から構成されるゆえに (Davis, 1994; 櫻井ら, 2011; 登張, 2000), その差別化と精選に注意が必要である。また、以前までの共感性研究の多くは、苦境にある他者への個人の援助行動を促進し、攻撃行動を回避・抑制する要因として取り上げていることがほとんど (櫻井ら, 2011) と言われる中で、他者感情へのポジティブ・ネガティブな共感的感情反応を検討した研究 (葉山ら, 2008), 認知的共感性に再注目した研究 (今野, 2013), 他者指向的な共感性の研究 (鈴木, 2015) など、自他の感情の区別に注目した研究が新たに主流となってきた。このような共感性の発揮の仕方は、共感性の中でも「視点取得」得点が高い状態であり (Davis, 1983; Hoffman, 1990; 登張, 2003), 成人レベルの共感 (角田, 1994; 角田, 1995), すなわち成熟した人格の有する1つの姿を表すとされている。

そこで本研究では、近年の国内外の共感性研究の新しい流れを踏まえた上で、大学生を対象に、自他の区別ある共感性研究の動向について言及していくことを目的とする。

【方法】

近年の国内外における共感性研究を概観し、整理していく。文献検索は、まず国内において、「大学生」「共感性」をキーワードに1980年から2016年までの学会論文を検索した。研究雑誌は、教育心理学研究、発達心理学研究、パーソナリティ研究、カウンセリング研究、社会心理学研究、実験社会心理学研究、学校心理学研究、応用心理学研究であった。また、これらの研究雑誌以外でも研究動向を把握するために必要だと考え、紀要論文、および紀要で引用されている論文についても文献研究の対象とした。その結果、1980年～2016年までの研究で32件が該当した。

さらに、国外においても1980年から2016年までの学術論文を検索した。PsycArticlesで「empathy」「role taking」「perspective taking」をキーワードに検索し、査読有り、対象を「young adulthood」に限定したところ、61件が該当し、児童期までを対象にしている研究、特定の職業分野（医療・カウンセラー分野）に関する研究を除いたところ、その数は20件に絞られた。

【結果】

（1）共感性の尺度作成に関する研究

共感性の尺度は、Davis（1983）の対人的反応性指標（IRI）が主流であるが、日本でもIRIをベースとした尺度が数多く開発されている（木野・鈴木・速水、2000；澤田・斎藤、1996；登張、2003など）。対人的反応指標は、「共感的関心」「視点取得」「個人的苦痛」「ファンタジー（想像性）」の4下位尺度からなり、

それぞれの概念との関連研究が行われている。

たとえば登張（2003）は、近年までの共感性尺度のカテゴリーを再検討した上で、青年期用の新たな多次元共感性尺度を作成した。共感的関心、個人的苦痛、ファンタジー、気持ちの想像の4下位尺度からなり、青年期前期・中期・後期を通して同じ意味内容で検討でき、利用できる尺度である。

鈴木・木野（2008）は、共感性の多次元的アプローチに従い、他者の心理状態に対する認知と情動の反応傾向をそれぞれ他者指向性—自己指向性という視点から弁別的に測定する多次元共感性尺度（MES）を作成した。「他者指向的反応」「自己指向的反応」「被影響性」「視点取得」「想像性」の5因子が得られ、各下位尺度と尺度全体の構成にはおおむね満足できる信頼性と妥当性が確認され、性格特性としての共感性を多面的に理解する上で役立つとされた。自他の区別かつ、多次元性を兼ね備えた尺度であり、短縮版も作成されていることから（木野・鈴木、2015）、今後は関連研究の蓄積が期待される。

一方で、共感性の多次元性には注目せず、別の視点から作成された尺度も存在する。たとえば角田（1994、1995）は、成人レベルの共感について言及し、自他の個別性を踏まえた上での共感こそが他者理解に必要であり、個別性の自覚が現実には他者と関わることを可能にしている。この考え方をもとに、「感情の共有経験」と「感情の共有不全経験」を測定する2下位尺度からなる共感経験尺度を作成し、両得点の高かった者が「自己の個性への自覚」が高い者として定義され、このような様相を“自他の個性に基づく他者理解につながる共感”と

している（鈴木，2006a）。

橋本（2005）は，角田（1994）の尺度をもとに，肯定・否定感情に着目した4次元の新たな共感性尺度を作成した。具体的には，「肯定感情共有不全」「肯定感情共有」「否定感情共有」「否定感情共有不全」の4因子構造となり，他の尺度との関連により，感情面を主とする尺度と考えられた。

また鈴木（2006b）も，角田（1994）の尺度をもとに，個別性の認識に基づいた共感を示す「ポジティブな情動に対する共感」「ネガティブな情動に関する共感」と，情動的な共感を表す「相手を尊重した共感」「相手との相違を意識した共感」からなる共感体験尺度を作成し，「相手を尊重した共感」とボランティア活動，話を聞く際の愛他的態度と関連を示したことから，愛他的行動および態度と関連するのは情動的な共感ではなく，個別性の認識に基づいた共感であることを明らかにした。

葉山ら（2008）は，既存の尺度には共感性の構成要素に検討の余地があるとして，共感性の認知的側面として，「他者の感情に対する敏感性」と「視点取得」，感情の側面として「ポジティブな感情の共有」，「ネガティブな感情への同情」を取り上げ，共感性の生起するプロセスに注目した新たな尺度を作成している。

今野（2013）は，共感性の下位概念の構成が十分でないこと，葉山ら（2008）以降の研究で共感性の認知的側面の検討が乏しく一貫していないことを指摘したうえで，「他者感情の理解」と「視点役割取得」の2下位尺度からなる認知的共感性尺度修正版を作成している。

以上のことから，共感性を測定する尺度は，概念が多義化したとともに，その課題点を改良

する形で作成が進んでいること，“ポジティブな感情”や“ネガティブな感情”への共感，といった，感情の側面における個人の捉え方に重きを置いた研究が増えつつあること，そして，共感性の認知的側面を検討している研究では，結果の一貫性の無さが課題となっていることが明らかとなった。

（2）共感性と諸変数との関連研究

海外の代表的な関連研究では，さまざまなパーソナリティ変数，向社会的行動との関連が検討されている。（Batson, Bolen, Cross & Neuringer-Benefiel, 1986; Batson, Dyck, Brandt, Batson, Powell, McMaster & Griffit, 1988; Davis, 1983; Davis, Hull, Young & Warren, 1987; Eisenberg, Schaller, Fabs, Bustamante, Mathy, Shell & Rhodes, 1988）。

（i）向社会的行動，攻撃行動，社会的スキルとの関連

Goldstein, Vezich, Shapiro & Jenessa（2014）は，向社会的行動に及ぼす視点取得の重要性を述べ，実証した。また佐藤ら（2013）は，視点取得を伴った共感性の高さは，攻撃行動の抑制および向社会的行動の促進に共通して関連があると述べる。しかしながら，身体的攻撃行動の抑制と向社会的行動の促進では，共感性の構成要素間のバランス殿関連の仕方が異なることを示唆している。

鈴木（1992）は，共感性が高く，外向的な人は，向社会的行動をとりやすい傾向があるものの，社会的スキルの上手・下手は向社会的行動には関与しないことを示唆している。

松浦（2006）は，角田（1994）の尺度を用い

て援助行動発動時における社会的スキル、共感経験、援助行動経験の影響について検討し、男子では社会的スキルから援助行動へのパスは有意ではなかったが、女子は有意であること、共感経験尺度と援助行動生起とに関連が示されたこと、過去に経験のある援助については次回も援助を行う可能性があり、援助経験が成功経験となっていることが、今回の援助意思に結びついていることが明らかとなった。

植村ら（2008）は、葉山ら（2008）の共感性プロセス尺度を用いて、向社会的行動との関連を調べた。その結果、ポジティブな感情への好感およびネガティブな感情への同情から向社会的行動への正のパスが示され、相手の感情に対する他者志向的な反応が向社会的行動を導くことが明らかとなった。

以上を概観すると、向社会的行動および攻撃性、攻撃行動との関連研究は、研究者間で一貫した結果が得られているといえるが、社会的スキルとの関連研究では、結果の一貫性の無さが課題となっていることが明らかとなった。

（ii）パーソナリティ、友人関係、適応との関連

海外における関連研究では、苦痛や共感を表す形容詞への反応強度との関連（Baston et al, 1986）、制御性との正の関連（Eisenberg et al, 1991）、友人や兄弟との葛藤のときに問題解決策をとりやすいことや、攻撃的反応が減ること（Richardson, Hammock, Smith, Gardner & Signo, 1994）、自尊心、他者への非利己的感受性との正の関連（Underwood & Moore, 1982; Davis, 1983）、などが結果として明らかになっている。

一方で、日本でもいくつかの研究が見られ

ている。角田（1998）は、大学生に共感経験尺度改定版（EESR）と自己愛人格目録（NPI）を実施し、「共有型」は「不全型」よりも“自己愛的確信”得点が高いことを明らかにしている。

さらに角田（2009）は、教職志望者と臨床心理職志望者の人格特性の違いを明らかにするため、教職志望者と臨床心理職志望者の大学生に対して、新性格検査および共感経験尺度をおこなった。結果、教職志望者は臨床心理職志望者よりも社会的に外向的で、活動的であり、自己顕示的で、攻撃性が強く、非協調的な面を持っていた。一方、臨床心理職志望者は、教職志望者に比べて他者の感情状態への感受性が高かった。

菊池ら（2009）は、家族や友人との関係が共感性を説明するという仮説の下、大学生に探索的に検証を行った。その結果、回帰式全体では有意性が認められたが、決定係数は低く、採用した予測変数（家族構成、家族機能、友人との接触頻度、友人関係）では共感性を説明するには不十分であることが明らかとなった。

大庭（2010）は、大学生の自我同一性と共感性の相関分析から、共感性のなかでも情動的共感性が高い者は、低い者に比べて特性不安を高く持っていること、共感性が高い者は他者の情動に敏感であるため、自分自身も敏感に反応し、不安な気持ちを抱いてしまうこと、そして、共感性の情動的側面の高さに関わらず、自我同一性が確立していない者ほど特性不安が強いことを挙げている。これは、情動的共感性が高い者の中には、一見したところ共感しているようにみえるが、実際は自分がなく他者に合わせるような態度しかとることができず、心理的不適

応状態を生じている可能性を示唆している。

山本（2007）は角田（1994）の尺度を用いて、今までの共感性の研究では扱われてこなかった「共感される（被共感性）」の経験に注目した。その結果、「被両高型」は他者とのコミュニケーションに対して適度にバランスがとれているという意識をもつ、あるいは自己と他者の感情共有の成否の両極の間で揺れる不安定な状態であるという2つの可能性が考えられること、「被不全型」は不安定で適切でない他者との情緒的な関わりへの意識が強いということ、「被両貧型」は志向性を持ちながらも他者との情緒的な関わりを今までに十分に得てこなかったために、他者の感情表出に適切に対処できないという意識をもつこと、などを明らかにした。ただし、共感と被共感は相互的かつ重層的に関連しており、被共感の概念も明確ではないため、質的調査などで臨床像を丁寧に見ていく必要性を指摘した。

以上のことから、パーソナリティや友人関係、適応との関連は一定の傾向に結果が出ているといえるが、測定方法や予測変数の再検討が今後必要であることが明らかとなった。

【考察】

本研究では、大学生を対象とした共感性研究の動向について、国内外から知見を整理し、自他の区別ある共感性研究の動向について言及していくことを目的とした。その結果、以下のような課題が挙げられると考えられる。

まず1点目は、近年の自他の区別ある共感性を測る尺度における課題である。それは、さまざまな感情に対する捉え方（反応）に重きを置いた研究が増えつつある中で、認知的共感性へ

の比重が少なく、今後も尺度の改良が必要となるのではないかと、ということである。デイヴィス（1999）は、感情的側面の共感性と共に認知的側面の共感性の重要性を述べている。また、認知的側面をもつ視点取得尺度は、様々な状況での個人の視点取得の傾向だけを問題にし、視点取得の能力や力量が取り上げられていないこと、すなわち、他の人々の視点を取ろうとする試みをどのくらいやろうとするのか（過程）を質問していて、この過程から出てくる対人的な正確さや、社会的な洞察については調べられていないとされている（デイヴィス、1999）。このような課題への解決策として、たとえば個人の視点取得能力の度合いに、過去の所属集団における役割体験の頻度などを加味することで、自他の区別ある共感性の認知的な側面がより明確に検討されうのではないかと考えられる。

続いて2点目は、共感性との関連研究における課題である。向社会的行動や攻撃行動との関連研究、パーソナリティや友人関係、適応との関連研究などと比較すると、個人の社会的スキルやコンピテンシーとの関連研究が少ないこと、そして、その結果に一貫性がないことが予想される。具体的なスキルを適切に発揮するためには共感性が必要とされる（鈴木、2015）とすれば、チームワーク能力との関連（杉森・古屋・相川・土井・曹、2013）など、複数のスキルがどのように共感性と関連するのか、ということに言及した研究が今後は望まれる（櫻井ら、2011；氏家、2011）といえるだろう。

以上2点を今後の課題としたい。

引用文献

- 相川 充・高本真寛・杉森伸吉・古屋 真 (2012). 個人のチームワーク能力を測定する尺度の開発と妥当性の検討 社会心理学研究, 27, 139-150.
- Batson, C.D., Bolen, M.H., Cross, J.A., & Neuringer-Benefiel, H.E. (1986). Where is the altruism in the altruistic personality? *Journal of Personality and Social Psychology*, 50, 212-220.
- Batson, C.D., Dyck, J. L., Brandt, J. R., Batson, J. G., Powell B. A., McMaster M. R., & Griffitt C. (1988). Five Studies Testing New Egoistic Alternatives to the Empathy-Altruism Hypothesis. *Interpersonal Relations and Group Processes*, 52-77.
- Batson, C. D., Turk, C. L., Shaw, L. L., & Klein, T. R. (1995). Information Function of Empathic Emotion: Learning That We Value the Other's Welfare. *Journal of Personality and Social Psychology*, 68, 300-313.
- Carlo, G. Allen, J. B., & Buhman, D. C. (1999). Facilitating and Disinhibiting Prosocial Behaviors: The Non Hear Interaction of Trait Perspective Taking and Trait Personal Distress on Volunteering. *Basic and Applied Social Psychology*, 21, 189-197
- 中央教育審議会 (2016). 個人の能力と可能性を開花させ、全員参加による課題解決社会を実現するための教育の多様化と質保証の在り方について (答申)
- Davis, M. H. (1983). Measuring individual differences in empathy: Evidence for a multidimensional approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, 44, 113-126.
- Davis, M. H., Hull, J. C., Young, R. D., & Warren, G. G. (1987). Emotional reactions to dramatic film stimuli: The influence of cognitive and emotional empathy. *Journal of Personality and Social Psychology*, 53, 397-410.
- Davis, M. H. (1994). *Empathy: A social psychological approach*. Colorado: Westview Press.
- デイヴィス, M. H. 菊池章夫 (訳) (1999). 共感の社会心理学 川嶋書店
- Eisemberg, N., Schaller, M., Fabes, R. A., Bustamante, D., Mathy, R. M., Shell, R., & Rhodes, K. (1988). Differentiation of personal distress and sympathy in children and adults. *Developmental Psychology*, 24, 766-775.
- 遠藤由美 (2015). グローバル社会における共生と共感 エモーション・スタディーズ, 1, 42-49.
- Goldstein, N. J., Vezich, I. S., Shapiro, & Jenessa R. (2014). Perceived perspective taking: When others walk in our shoes. *Journal of Personality and Social Psychology*, 106, 941-960.
- Ghemawat, P. (2007). *Redefining global strategy: Crossing borders in a world where differences still matter*. Boston: Harvard Business School Press.
- 橋本秀美 (2005). 肯定・否定感情に着目した共感性尺度の開発 心理臨床学研究, 22, 637-647.
- 葉山大地・植村みゆき・萩原俊彦・大内晶子・及川千都子・鈴木高志・倉住友恵・櫻井茂男 (2008). 共感性プロセス尺度作成の試み 筑波大学心理学研究, 36, 47-56.
- Hoffman, M.L. (1990). Empathy and justice motivation. *Motivation and Emotion*, 14, 151-172.
- 石戸 光 (2007). 地球規模の公共経済哲学を見据えて—異質な他者との対話の可能性— 公共研究, 4, 105-122.
- 角田 豊 (1994). 共感経験尺度改定版 (EESR) の作成と共感性の類型化の試み 教育心理学研究, 42, 193-200.
- 角田 豊 (1995). とらえ直しによる治療者の共感的理解とクライアントの共感性について 心理臨床学研究, 13, 145-156.
- 角田 豊 (2009). 教職志望者と臨床心理職志望者の人格特性の相違について—教師とスクールカウンセラーの協働に向けて— 京都教育大学紀要, 99-109.
- 菊池章夫 (1988). 思いやりを科学する 川嶋書店
- 菊池章夫 (2004). Kiss-18 研究ノート 岩手県立大学社会福祉学部紀要, 6, 41-51.
- 菊池文音・大坊郁夫 (2009). 家族・友人関係と多次元的共感性との関連 日本パーソナリティ心理学会大会発表論文集, 176-177.
- 木野和代・鈴木有美 (2015). 多次元共感性尺度 (MES) 10 項目版の検討—原版と同様の分析を通して—日本教育心理学会第 57 回総会発表論文集, 687.
- 木野和代・鈴木有美・速水敏彦 (2000). 友人の不快

- 感情調整に関わる要因の検討—女子青年を対象に— 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要, 47, 59-68.
- 小池はるか (2014). ポジティブ感情への共感と迷惑行為抑制との関連 高田短期大学紀要, 32, 1-6.
- 今野仁博 (2013). 認知的共感性尺度修正版の作成と信頼性・妥当性の検討 岡山学院大学・岡山短期大学 紀要 36, 9-14.
- 松浦 均 (2006). 援助行動発動時における社会的スキル, 共感経験, 援助行動経験の影響について 応用心理学研究, 31, 76-88.
- Eisenberg, N., Fabes, R. A., Schaller M., Miller, P., Carlo G., Poulin R., Shea C., & Shell R (1991). Personality and Socialization Correlates of Vicarious Emotional Responding. *Journal of Personality and Social Psychology*, 61, 459-470.
- 大西彩子・吉田俊和 (2010). いじめの個人内生起メカニズム—集団規範の影響に着目して— 実験社会心理学研究, 49, 111-121.
- 大庭三奈 (2010). 大学生の自我同一性との関連からみた共感性の様相—特性不安を心理的不適応の指標として— 九州大学心理学研究, 11, 127-133.
- Richardson, D. R., Hammock, G. S., Smith, S. M., Gardner, W., & Signo, M. (1994). Empathy as a cognitive inhibitor of interpersonal aggression. *Aggressive Behavior*, 20, 275-289.
- Rychen, D. S. & Salganik, L. H (Eds.) (2003). Key competences for a successful life and well-functioning society. Gottingen, Germany: Hogrefe & Huber. (立田慶裕 (監訳) (2006). キー・コンピテンシー: 国際標準の学力をめざして 明石書店)
- 櫻井茂男・葉山大地・鈴木高志・倉住友恵・萩原俊彦・鈴木みゆき・大内晶子・及川千都子 (2011). 他者のポジティブ感情への共感的感情反応と向社会的行動, 攻撃行動との関係 心理学研究, 82, 123-131.
- 佐藤有佳・今井正司・三宅佑果・熊野宏昭 (2013). 共感性のバランスと社会的行動の関連 早稲田大学臨床心理学研究, 12, 39-44.
- 澤田瑞也・斎藤誠一 (1996). 共感性の多次元尺度作成の試み (1) 日本教育心理学会第37回総会発表論文集, 71.
- 杉森伸吉・古屋 真・相川 充・土井聡子・曹 蓮 (2013). 「個人のチームワーク能力測定尺度」の社会人への一般化可能性の検討—因子構造の検討と異質な他者への共感性測定尺度との関連— 日本教育心理学会第55回総会発表論文集, 116.
- 鈴木郁子 (2006a). 教師の資質向上を目的とした共感研究の必要性 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要, 53, 85-96.
- 鈴木郁子 (2006b). 学校教師と教員養成系大学生の共感性に関する研究—共感経験尺度の作成および信頼性・妥当性の検討— 学校心理学研究, 6, 19-30.
- 鈴木隆子 (1992). 向社会的行動に影響する諸要因—共感性・社会的スキル・外向性— 実験社会心理学研究, 32, 71-84.
- 鈴木有美・木野和代・出口智子・遠山孝司・出口拓彦・伊田勝憲・大谷福子・谷口ゆき・野田勝子 (2000). 多次元共感性尺度作成の試み 名古屋大学大学院人間教育発達研究科紀要, 47, 269-279.
- 鈴木有美・木野和代 (2008). 多次元共感性尺度 (MES) の作成—自己指向・他者指向の弁別に焦点を当てて— 教育心理学研究, 56, 487-497.
- 鈴木有美・木野和代 (2015). 社会的スキルおよび共感反応の指向性からみた大学生のウェルビーイング 実験社会心理学研究, 54, 125-133.
- 谷伊織・天谷祐子 (2009). 性格特性の5因子と共感性および孤独感の関連 日本パーソナリティ心理学会大会発表論文集, 132-133.
- 登張真穂 (2000). 多次元的視点に基づく共感性研究の展望 性格心理学研究, 9, 36-51.
- 登張真穂 (2003). 青年期の共感性の発達: 多次元的視点による検討 発達心理学研究, 14, 136-148.
- 植村みゆき・萩原俊彦・及川千都子・大内晶子・葉山大地・鈴木高志・倉住友恵・櫻井茂男 (2008). 共感性と向社会的行動との関連の検討—共感性プロセス尺度を用いて— 筑波大学心理学研究, 36, 49-56.
- 氏家悠太 (2011). 共感と社会的スキルとの関連性—Empathizing-Systemizing 理論による個人差の検討 日本パーソナリティ心理学会大会発表論文集, 67.

Underwood, B., & Moore, B. (1982). Perspective-taking and altruism. *Psychological Bulletin*, 91, 143-173.

渡辺弥生（2014）．学校予防教育に必要な「道徳性・

向社会的行動」の育成 発達心理学研究, 25, 422-431.

山本翔太（2007）．共感経験と被共感経験の関連 立
教臨床心理学研究, 1, 53-63.